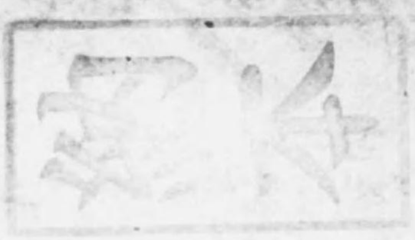
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5

369
467



特237
658

向旅集

高濱虛子序
野村泊月著

花鳥堂版

昭和十二年
納本

序

野村泊月君の句に就ては先に「比叡」の時分に言つたことがあるが、この「旅」に就ても亦數言を費さうとなると大抵は前に言つたことを繰返すに過ぎない。これは泊月君に進歩が無くて舊態依然たるものであるからではなく、一生一句風といふ嘗て私の言つた言葉から寧ろこれを、俳句の正しい道を歩んでゐるものとしてそのあとを祝福する意味から言ふことである。

例へば芭蕉にしたところがその前半の談林調時代の模倣作は別として古池の句以後の作になると一つの句風を以て終始

した。其角、去來、凡兆、許六、丈草等の人々もみなさうであり、蕪村、太祇、几董、召波又下つては一茶、子規等に到るまで、それ〴〵の句風には一貫して變らぬものがある。

それでいゝのであると云ふよりもそれがいゝのであると私は考へて居る。自分と云ふものを打成しきらない人々の俳句は、その人の特色といふものがつかめないわけであるが、ほんたうに自分といふものを打成した場合は、その人で無ければならぬものが光を放つて來るのであつて、それが終始その人の句を特色づけるのである。一句風の端緒はそこに見出されるのであつてその人の最後までその光はつゞいて行くべきものであ

る。

子規がたはむれに何々調と題する俳句を作つてそれを世間に發表したことがあるのを記憶して居るが、その何々調と稱するもの例へば蕪村調、去來調、一茶調と稱するところの俳句は一向に蕪村に似て居らず去來に似て居らず一茶に似て居らず、似てゐるものを強いて求むればそれは子規の句に似てゐると云つたやうなものであつた。それはそれでいゝのである。子規が蕪村にならうと思つても去來にならうと思つても一茶にならうと思つてもそれは出來ない相談であつて、子規は遂に子規なのであるといふことは、子規の個性をどうすることも出來な

いからである。それと同じ事であつて、一生一句風で滿足しないで新らしい發展をしやうといくらもがいたところで、その人の放つ光は蔽ふべくもなく、やはり一生一句風に終るのが落である。

人の一生といふものは誠に短いものであり、見やうによれば一瞬時とも云ふべきものであつて、一生一句風だけであつてもそれを殘すといふことは大變な功績と云はねばならぬ。さういふ俳人が澤山出てそれ〴〵異つた句風を俳壇に提供して百花が爛熳と咲き誇るやうな狀態を呈するといふことは誠に盛事と云はねばならぬ。たま〳〵一生に二三句風を打成し得る

偉人が生じたところで、これを俳壇全體から見た場合、一人一句風の人が二三人同時に生じたと云ふばかりであつて、俳壇の盛事を誇る上から云つたならば大した變りはないのである。それよりも一人一句風といふその句風が如何に特色があり輝いたものであるかといふことが寧ろ問題なのである。

兎角若い人の仲間にはこの一人一句風といふことに飽き足らないで、短い一生に澤山の仕事が出來るやうに考へて何句風も轉變しなければ進歩がないものゝ如く考へてゐるやうであるが、その勇氣は買つてやらねばならぬ所であるとして、私はその考はまだ淺いと思つてゐるのである。高所より大觀すれば

一生一句風であるといふことこそ尊いのであつて、その一句風を完成することに一生涯かゝつてゐても尚十分で無いと考へるのであり、その一句風を打成するために天が生命をその人に授けたものとすら考へてゐるのである。

私はこゝで又深と云ふ一字をとり出ださねばならぬと思ふ。嘗て「深は新なり」と云ふことを云つたことがあつて、深い〳〵と志すことがだん〳〵と新らしくなつてゆくといふことであると云つたが、其と同じことであつて自分の一句風を深く深くと一生かゝつて鍛錬してゆくといふことが、自分自身のためでもあるし、又俳句界全體から見てこの上ないいゝことであると考

へるのである。なまじいに變化を求めることに急で淺く淺くと匐ひ廻ることは、自分自身何の利益がないばかりか俳壇全體から見て何の貢献もしないことになる。

この意味に於て泊月君のこの「旅」は「比叡」の句風と何等異るところが無いものであつて、しかもその不斷の努力は一歩深き所に及んでゐるやうに感ぜられるのである。その最も形の上に現れた努力といふものゝ一つはこの書名の現す旅といふことを好んでした一點でも明らかなことである。昔、芭蕉が殆ど生涯を旅で暮したといふその旅と泊月君が數年來試み來つた旅とは多少性質の違ふものもあるが、しかし高山大川に接觸し心

を專ら四季の變化の上に遊ばすといふことは、日常の繫縛から離れ得ることであつて、その爲に句を作る機緣は自ら生ずるわけである。

蝶々のたゆたひわたる荒瀨かな
前山を躍り落ち來る揚羽かな
趨のべて谷へ落ちゆく揚羽かな
雲間より落ちて天河の瀧となる
とん〳〵と下りゆく人の肩に杖
大臺を下りてその日に大峰へ
雪溪の眞下にかゝる瀑布かな

忽然と一峰聳ゆ炎天下
柚が妻葛湯の塵をはじらひぬ
葛水や天倉山に雲かゝる
國分けの大王杉やほととぎす
夏の日を淡しと思ふ額の原
鷄を抱へて戻る葛の徑
脫ぎかけし女のものや葛むぐら
女房の葛がくれなる湯あみかな
大齒朶の茂れる中を走る水
秋晴や濱にひろけて小切れ賣る

秋晴や九十九島々漕ぎめぐる

倒木に動亂したる狹霧かな

鐘懸を霧の絶間に仰ぎけり

二タ谷の霧立ちのぼり相搏てり

峠茶屋花野を統べてありにけり

瀧の面を七夕竹の落ち來る

峽深く人のあと追ふ時雨かな

煙突の出てゐる雪の平かな

等の句は主として高山大澤に遊んだ時の所得であらうと思はれて、その

國分けの大王杉やほととぎす

の句の如き、尨然とした大貌は泊月君でなければ見られぬものとしてほゝえましきものがある。かと思ふと又次の如き輕快なもの、艶麗なもの、纖細なものがある。

春雨の窓よりのべし硯かな

海の上の名草山より春の月

靴をもてすくうて居るや春の水

兩の手にすくひあげたる落花かな

裾折つて下向支度や花の雨

藤浪の下に竝べる春日巫女

藤浪に向へる巫子の机かな

つゝじ濃し鳳凰堂の兩翼に

風浪の今日の寒さや海苔を採る

あれを見よ僧のをどれる遊び舟

川床の妓に聞く其後の人の上

緣先を走れる水のあやめかな

石蕗の鏡のごとき良夜かな

月空へ躍りてすゝむ舳かな

蔓の先出てゐてまろし雪むぐら

これ等の句はすべて「比叡」に見えたる泊月君の句風と同じ種

類のものであると云ふよりもそれに一歩を進めたるものであることを看取せねばならぬ。「比叡」以來五年間の泊月君の努力がこの「旅」を生み出だしたるものであることはこれ等によつても明かであり、一人一句風であつていよ／＼深きに歩を進めることはこの作者のために祝福せねばならぬことである。

昭和十二年二月二十三日

ホトトギス發行所にて

高濱虛子

春目次

時候

長閑……三
行春……三
春雜……三

天文

東風……五
春風……五
春の雪……六
春の雨……六
春の月……七
花曇……八

地理

雪解……九
残雪……九
陽炎……一〇
春潮……一〇
春の山……一二
春の水……一三

春の海……一四
春泥……一四

人事

風車……一五
菊根分……一五
島原太夫の道中……一六
灌佛……一六
遍路……一六
山焼……一八
野遊……一九
摘草……二〇
草餅……二〇

動物

燕……二二
鶯……二三
囀り……二四
松蟬……二四
蝶……二五
蜂……二五
虹……二六
引鶴……二六
鯛舟……二〇
磯竈……二二
蠶飼……二二

鳥の巣……二六
花鳥賊……二六
諸子……二七
ほて……二七
いかなご……二七
榮螺……二七
馬酔木……二八
藤……二九
躑躅……二九

植物

椿……二九
梅……三〇
桃……三一
櫻……三一
辛夷……三二
柳……三一
柳絮……三一
芹……三一
土筆……三一
蕨……三一
筍……三一
虎杖……三一
けんけ……三二
春の草……三二

物の芽……四四
牡丹の芽……四四
芍薬の芽……四四
若布……四四
石蕗……四五
海苔……四五
もづく……四六

夏

時候

涼し……四九
暑さ……四九
夜の秋……五〇

天文

夏の雪……五一
つゆ入り……五一
五月雨……五一
黒ばえ……五一
五月晴……五一
夏の日……五一
夏の雨……五一
夕立……五一
雷……五一

虹……五四
薫風……五四
朝曇……五四
烈日……五五
炎天……五五
日盛……五五
夕焼……五六
夏の月……五六
雲の峰……五七
夏霞……五八
圓虹……五八
御来迎……五八
雲海……五八

地理

雪渓……六一
お花畑……六二
夏の山……六五
夏の川……六六
瀧……六六
清水……七〇
泉……七〇

人事

峰入……七一
登山……七一

祭……七三
梶鞦……七四
舟遊祭……七五
天神祭……七五
田掻……七五
頼政忌……七五
早乙女……七六
田植……七六
田草取……七七
日傘……七八
日焼……七八
打水……七九

葛湯……七九
汗……八〇
裸……八〇
蚊帳……八一
午寝……八一
泳ぎ……八二
遊船……八二
ヨット……八三
鮎遊……八四
鵜飼……八四
簗……八四
川床……八五

ビール……八六
心太……八六
避暑……八六
キャンプ……八七
夏帽……八七
日覆……八七
簾……八八
作り雨……八八
藻刈……八八
草刈……八八
干草……八九

老鶯……九一
時鳥……九一
郭公……九三
霞切……九三
夏の鴨……九三
螢……九三
蟬……九四
夏の蝶……九五
浮巣……九五
鵜……九五
鮎鷹……九五
經……九六

動物

天魚……九六
岩魚……九六
鮎……九七
鬪魚……九八
水馬……九八
山蘭……九八
蘭……九九
蛾……九九
螻……九九
蛇……九九
蟇……一〇〇
蛸……一〇〇

植物

菖蒲……一〇一
若葉……一〇一
通草の花……一〇二
定家かづら……一〇二
蓮……一〇二
卯の花……一〇二
つるでまり……一〇三
額の花……一〇三
行者葱……一〇五
深山しぐれ……一〇五
早苗……一〇六

青蔦……一〇六
葛……一〇六
凌霄……一〇八
麥……一〇八
茂り……一一〇
綠蔭……一一一
木下闇……一一一
あやめ……一一三
杜若……一一三
鷺菅……一一三
夏雪草……一一四
たかねばら……一一四
著莪の花……一一四
薔薇……一一四
葉櫻……一一五
石楠……一一五
朴の花……一一五
栃の花……一一六
覇王樹……一一六
新樹……一一六
病葉……一一七
牡丹……一一七
夏柳……一一七
鈴蘭……一一八

西瓜……二八
苺……二八
罌粟……二八
夏草……二九
青蘆……二九
水芭蕉……二九
萍……二九
藻……三〇

秋

時候

今朝の秋……三三
新涼……三三
朝寒……三四
夜寒……三四
秋の暮……三四
秋の夜……三六
秋雜……三六

天文

天の川……三七
秋晴……三七
秋の雨……三九
秋の空……三一
月……三一

無月……三六
初嵐……三七
秋の日……三八
秋の雲……三八
うろこ雲……三八
秋風……三九
野分……四二
露……四二
霧……四三

地理

秋の水……四七
秋の湖……四八
秋の海……四八
秋の山……四九
出水……四九
花野……五〇

人事

七夕……五五
棚經……五六
燈籠……五六
墓參……五七
踊……五七
子規忌……五七
夜なべ……五八

施餓鬼……一五八
地藏盆……一五八
秋祭……一五八
障子洗ふ……一五九
下り簗……一五九
木賊刈……一五九
小鳥網……一五九

動物

蜻蛉……一六一
鯛……一六一
鹿……一六二
小鳥……一六二
渡鳥……一六二
秋燕……一六三
鶺鴒……一六三
懸巣……一六三
秋の蝶……一六四
蟲……一六四
鱒……一六四
鯊……一六五

植物

木犀……一六七
ザボン……一六七
銀杏……一六七

椎の實……一六八
木の實……一六八
菌……一六九
曼珠沙華……一六九
珠數玉……一七〇
こかいご……一七〇
萩……一七〇
桔梗……一七二
松蟲草……一七二
るりひごたい……一七二
竹の春……一七三
芋……一七三
無花果……一七三
烏瓜……一七三
なゝかまど……一七三
稻……一七四
粟……一七四
草虱……一七四
柿……一七四
栗……一七五
桐一葉……一七五
薄……一七五
蘆……一七六
末枯……一七六

菊……一七七
紅葉……一七七
蔦紅葉……一八〇
草紅葉……一八〇
龍膽……一八〇

冬

時候

師走……一八五
行年……一八五
除夜……一八六
冷ゆる……一八七

小春……一八七
短日……一八七
冬雑……一八七

天文

冬日……一八九
時雨……一八九
雪……一九一
霙……一〇一
風花……一〇一
冬の月……一〇一
寒月……一〇一
冬の空……一〇一

地理

霜……一〇五
氷……一〇五
氷柱……一〇五
冬の瀧……一〇六
瀧氷る……一〇六
冬の水……一〇六
刈田……一〇七

人事

焚火……一〇九
柵……一〇九
爐……一一〇
火燵……一一〇
手袋……一一一
頭巾……一一一
スキー……一一一
徘雪車……一一三
スケート……一一三
橇……一一三
霧笛……一一五
氷切……一一五
薄刈……一一五
蘆刈……一一五
日向ぼこ……一一六

門松立……二六
年用意……二六
齒朶飾る……二七
寒造……二七

動物

猪……二九
河豚……二九
鴛鴦……二〇
寒鴉……二〇
鴨……二一
田鶴……二一
笹鳴……二一

植物

蜜柑……二二
返り花……二二
寒牡丹……二二
冬木……二五
枯葉……二五
落葉……二五
櫻落葉……二九
水仙……二九
枯木……三〇
寒林……三〇
散紅葉……三〇

冬紅葉……三一

新年

元日……二五
二日……二五
初日……二五
初空……二六
山の春……二六
初風……二六
初詣……二六
蓬萊……二七
初荷……二七
飾……二七
鏡餅……二八
初湯……二八
雜煮……二九
弓始……二九
羽子板……二〇
春著……二〇
左義長……二〇
藪入……二〇
萬歲……二一
猿廻し……二一
乘初……二一

手毬……二四一
凧……二四一
初鴉……二四一
なゝぐさ……二四三
目次終……

春

時候

長閑　波除の上に犬寢てのどかなり　八

行春　春惜む人や岬に手をかざし　同

春雜　水門を出づればひろし淀の春　一〇

天文

東風　朝東風に跣足の蜑の神詣　八

春風　春風や何におびえて鹿跳びし　一〇

こけし兒を出て抱く母や春の風　同

店先の榮螺ころげぬ春の風　一一

春の雪

春の雪小廣を越えてなかりけり　九

春雪の中に灯りぬ紀三井寺　同

神路山淡雪かけて晴れにけり　一一

青空となりつゝ降るや春の雪　同

崖裾をつたへる蜑に春吹雪　同

春の雨

花の上の塔に降るなり春の雨　八

春雨の窓よりのべし硯かな　九

春の月

海の上の名草山より春の月　八

春月や女が詣る玉津島　同

祭神は衣通姫や春の月　同

鹽竈の鳥居の前の春の月　同

鹽竈の中に人居り春の月　同

春月や宿の前なる妹背山　同

春の月出てゐて暗し雛の宮　同

奈良坂をのぼる向ふに春の月　同

はるかなる濤のうねりに春の月　一〇

花曇

對岸は戀野の藪や花曇　八

枯れて立つ杉の梢や花曇　同

堂にみつ念佛衆や花曇　九

花曇僧立ちいでて頭を撫でぬ　一〇

地理

雪解

雪解けの松の下なる玄關かな　九

青天に聳ゆる松の雪解かな　同

殘雪

馬醉木野のかなたの隈に殘る雪　八

陽炎　陽炎の燃えつゝ進む舳かな　一〇

春潮　龍神の注連の下まで春の潮　一〇

春潮のひきたる道を青島へ　同

驅けりては岩より落つる春の潮　同

椰子の實を戴せて到りぬ春の潮　同

春潮のめぐり遊べる礁かな　一一

春潮のおくれて落つる巖かな　同

春の山　しほりたる幕の下より春の山　八

旗立てゝ少年のぼる春の山　同

春山の一番上の茶屋の旗　同

旗振つて招いて居るや春の山　同

大砲の口が見え居る春の山　同

眞珠灣抱いて低し春の山　同

柴折戸を開けてのぼるや春の山　同

僧達のつけたる道や春の山　同

並杉の上に畑あり春の山　八

のぼりゆく人見てのぼる春の山　九

春の山驅け下りては又のぼる　同

釣橋も見えて居るなり春の山　同

春の山御菩薩池も見下ろされ　一〇

見下ろせばどれも丸しや春の山　二一

春の水

春水のきらめき落つる木の間かな　八

春水のかぶさり落つる巖かな　同

百舌野の中を流れて春の水　九

靴をもてすくうて居るや春の水　同

竹の扉を推せばこゝにも春の水　一〇

春の水遠くの家居うつりたる　同

春水にさし出て長き歩板かな　同

春の水籬の上にひろきかな　同

春水の落ち口に聳つ石一つ　同

板さけて來て架けくれぬ春の水　同

春水のよぢれて落つるところかな　同

黒鳥の嘴赤し春の水　一〇

春の水風船落ちて來りけり　同

春の海　小鳥籠つりたる窓に春の海　八

のぼりゆく手摺の下は春の海　同

ふらこゝや遙の下に春の海　同

崖づたひ下りゆく蟹や春の海　同

春泥　春泥や藝者は褄を前ばさみ　一一

人事

風車　風車賣れて初むる踊かな　一〇

風車持ちて抱かれてゆく子かな　同

菊根分　我を見て默つて僧や菊根分　八

島原太夫の道中

道中の大前帶の龍虎の繪　八

灌佛尼達のつくつて居るや花御堂　同

花びらの散り來て浮ぶ甘茶かな　九

遍路のぼりくる遍路の笠の見えそめし　八

荷を置いて花に出てゆく遍路かな　同

下道の花につゞける遍路かな　同

札箱を胸に居眠る遍路かな　同

ふためきて汽車より下りし遍路かな　同

荷を解ける白き手甲の遍路かな　同

京人の姿見とる、遍路かな　同

片隅に晝を寢て居る遍路かな　同

お遍路や時間を問うて憩ひをり　九

つゞきゆく繪島の裾の遍路かな　一〇

朝より足痛めをる遍路かな　同

門經もねんごろに發つ遍路かな　同

軒下に連れ待ち顏の遍路かな　同

手鏡も笠のうちなる遍路かな　一〇

花かけに娘遍路は手鏡を　同

夕風に笠背負ひゆく遍路かな　同

お遍路をのせて遠のくはしけかな　同

大濱にかくも寄り來し遍路かな　同

加太行の遍路ばかりに臨時船　同

山焼

山焼の炎の先を鹿走る　二

山焼を守る高張を頂上に　同

僧の列禰宜の列をりお山焼　同

水谷川にうつりて淋し山焼く火　同

山焼く火洩れて急ぎぬ竹柏の道　同

山焼の人垣作る麓かな　同

野遊

野遊の二人の中の焜爐かな　八

野遊の中に荷卸ろす餅屋かな　一〇

野遊の莫蓙さけて乘る渡舟かな　同

野遊の兒に帽著せて去に支度　同

摘草　摘草の人皆たちてをちを見る　一〇

草餅　今もある六田の渡の草餅屋　九

草餅を舷づたひ賣りに來る　一〇

草餅を乳ふくませてつまみをり　同

鯛舟　鯛舟の中に國旗を立てし舟　同

磯竈　頭の桶をおろしてはひる磯竈　八

乳飲兒を抱いて焚きをり磯竈　同

磯竈焚きつゝあれば春の雪　同

磯竈を立ち出る海女に沖の虹　同

蠶飼　猪肉亭飼屋となりて今もあり　九

山霧の下り來てつゝむ飼屋かな　一〇

動物

燕

庭石へ下りて燕の羽づくろひ　一〇

舟の路こゝにひらけて飛ぶ燕　同

鶯

鶯のおりきて啼けるベンチかな　七

啼きわたる鶯遠し覗き岩　八

うち晴れて鶯啼けりお頂上　九

こだまして鶯啼けり蘆の湖　一一

囀り

囀りの下の手摺にうまるかな　八

立枯の木の天邊に囀れり　同

囀りや庭深く來て土芳の碑　九

あちら向きこちら向きして囀れる　一二

松蟬

松蟬のこの道遠くくたぶれし　一〇

蝶

蝶々のたゆたひ渡る荒瀬かな　七

前山を躍り落ちくる揚羽かな　同

白樺の林をかける揚羽かな　同

蜘蛛のゐを破つてゆきし揚羽かな　同

翅のべて谷へ落ちゆく揚羽かな　八

落ちて來し蝶水近く翅うち去る　九

蜂

水飲んでブーンと蜂のとびにけり　七

虻　山虻にゆあみの肩をさゝれけり　九

引鶴　引鶴のあとをたゝめる茶店かな　一〇

烏の巣　巣ごもりて鵝鳥が居るや檻の隅　八

花烏賊　花烏賊をさけて二階と話しをり　一〇

諸子　洗場の人に寄りくる諸子かな　一〇

梅が枝につるせる桶の諸子かな　一一

ぼて　ちよぼ〳〵と泛子の動くはぼてならめ　一〇

いかなご　いかなごを干しひろけをる箒かな　八

榮螺　玄關に榮螺の籠や加太の宿　同

椿

植物

遠くより寄せくる潮や椿山　八

絶壁の上にゆらける椿かな　同

見送つて椿の下に並びけり　同

生簀籠椿の中に漂へり　同

手をつなぎ椿の花を見上げをり　同

梅

紅梅や大藁屋根の行在所　八

梅植ゑて公園といふ野山かな　同

立てかけて醪の櫂や梅の花　同

どてら著て河豚料り居り浦の梅　同

遠方の風にきらめく野梅かな　九

畦の梅さして外れゆく一人かな　同

一本の梅が下なる野宴かな　同

梅描きに來て泊り居り百姓家　同

描きかけの梅の畫がある離室かな　同

梅溪に臨みてありし書院かな　同

はたき打つ障子の音や梅日和　同

紅梅にひさご形なる手水鉢　同

蟹が家は梅にかけたる大根かな　一〇

桃

濁りたる池にのぞみて桃の花　八

櫻

高坏に盛られし菓子や花の雨　同

たれこめて見る古文書や花の雨　同

廊下にもある唐櫃や花の寺　八

床の間に古き瓦や花の寺　同

峰の花柱によりて見上げをり　同

花の上に塔が見えをる座敷かな　同

白妙の落花にまじる塵もなし　同

遠くより湧きたち来る落花かな　同

苔寺の花掃くこともなかりけり　同

庇よりさがれる花の盛かな　同

香煙のかゞよひわたる櫻かな　同

花の雲踏まへてわたる廊下かな　同

峰の花橋に戻りて仰ぎけり　同

大空にかざしてうすき櫻かな　同

吹きつけて散る櫻あり鏡岩　同

さかさまに雪洞さがる花の雨　同

洋傘を突いて道邊に花疲　同

道端によけて見て居り峰の花　同

満開の櫻の中に小鳥の巣　同

しづかにも鵯の居る櫻かな　同

一本の松にかくれぬ花の山　八

水道の水が出て居り花の下　同

鶯のとまつて居たり花の枝　九

幔幕の外にさがれる花の枝　同

絲櫻わけて出て來る舞妓かな　同

渡殿の人にしだるゝ櫻かな　同

男山の南に浮ぶ花の雲　同

遊船のゆきかふ花の梢かな　同

若草に坐れば遠くちる櫻　同

猿澤や花の梢に三笠山　同

三笠山のぼりかけしが花疲　同

奈良なれや畑の中に絲櫻　同

塀内のしだれ櫻に耕せり　同

滿開の花に沈める鴉かな　同

水高く撒いてゆくなり花の中　同

拜殿と社のあひのうす櫻　同

濡れ佛立たせたまへり花吹雪　同

御簾を帶にをさめぬ花の下　同

裾折つて下向支度や花の雨　九

僧一人經木書きをり花の雨　同

鶴は佇ち鴛鴦は泳けり花筏　同

滿開の花にかくれて灯る窓　同

長谷寺にやむべくもなし花の雨　同

一臺の自動車園み花の雨　同

生徒等に如意輪堂の花吹雪　同

君がため敷くハンカチや山櫻　一〇

金魚鉢並べてあるや花吹雪　同

兩の手に掬ひあげたる落花かな　同

花筵立ちてかなたへ會釋かな　同

さしかざす花の下なる入日かな　同

城壁の上に連らなる花の幕　同

花の上に陸橋ありて電車ゆく　同

瀧水に沿うてのぼれる落花あり　同

病人を抱き坐らせぬ花の下　同

相逢うて君が白髪や花の下　同

松の間の甍をわたる落花かな　同

竹の扉を推せばこぼるゝ落花かな　一〇

いそがしき日に挾まれて花見る日　同

立並ぶ花を境に二夕屋敷　二一

辛夷

遠方の辛夷にしづむ夕日かな　九

馬酔木

たゞ一人下りゆく徑のあせびかな　八

手を引いてくゞりゆきたる馬酔木かな　一〇

手かざして顧る野の馬酔木かな　二一

藤

舞臺より見る前山のかゝり藤　八

崖藤を遡りゆくはやてかな　同

天邊の巖より藤のかゝるあり　同

藤浪のかゝれる下の宮居かな　同

藤房のたれそろひたる瀧の上　同

藤垂るゝ大樹の下に佇ちにけり　同

藤の根にかけて見てゐる神樂かな　同

遠くより見えて春日の藤の杜　同

遅藤の奥くらがりに月日亭　八

かゝり藤うちつゝのぼる揚羽かな　九

藤棚の奥に茶店の暖簾かな　一〇

藤浪の下に並べる春日巫女　同

藤浪に向へる巫女の机かな　同

藤の根を跳り越えたる牡鹿かな　同

坐りたる芝生の四方にかゝる藤　同

躑躅

捨てゝあるつゝじの花に降りそめし　八

御手洗の屋根に置きたるつゝじかな　九

つゝじ濃し鳳凰堂の兩翼に　同

兩側のつゝじの中の尾嶺の徑　一〇

貯水池をめぐるつゝじの花ざかり　同

柳

夕ぐれの人立ちそめし柳かな　七

柳絮

湧きたちし柳絮見上げて舟進む　八

芹　奈良ははや雪解澤とて芹生ふる　二

土筆　土筆籠さげし手に抱くうなゐかな　一〇

蕨　柚の戸をいでしところの蕨かな　七

筍　筍を負うて出で来る寺の門　一〇

虎杖　虎杖の谿やうやくに深きかな　七

虎杖を折つて崖より飛び下りぬ　一〇

虎杖を折りゐる下に八瀬の里　同

けんけ　遠くまで傘干す畦のけんけかな　同

春の草　老どちのまどゐして居り春の草　九

目つむりて坐れる老や春の草　同

毛布著て病人坐る春の草　一〇

手術服著て腹這へり春の草　同

兒をねせておむつ替へをり春の草　一〇

物の芽　竹園ひして物の芽のありとこそ　九

牡丹の芽　牡丹の芽塀の外にも一並び　一〇

芍藥の芽　先に來て芍藥の芽にかゞみ居る　八

若布　燈臺の下にちらばり若布刈舟　同

石蓴　あら〳〵と採りては移る石蓴かな　二

かいなでてかいなでて採る石蓴かな　同

海苔　青海苔をかぶらぬ岩はなかりけり　八

海苔舟の今出盛と見ゆるかな　九

風浪の今日の寒さや海苔を採る　同

海苔舟の坐りて漕ぐは長閑なり　同

海苔の海のかゞやき見よや紀三井寺　同

鹽竈の注連の下より海苔の海　九

麥畑をわたりて運ぶ海苔障子　二

もづく

みめよくて流人の裔やもづく採る　九

夏

時候

涼し　涼しさや濶葉樹下のハンモック　七

堰の上に焚いて涼しき篝かな　同

坑口の涼しき風に向ひけり　八

暑さ

病人の暑しと云うて涙かな　二

夜の秋　夜の秋や木の間につゞく石燈籠　七

四阿に誰か居るらし夜の秋　同

こち向けば光る眼鏡や夜の秋　同

富田屋で蜜豆たべぬ夜の秋　一一

天文

夏の雪　絶壁の裾によごれて夏の雪　九

ついり　桑の木に沈める家のついりかな　一〇

五月雨　傘さして厨夫滑ぎ出ぬ五月雨　九

黒ばえ　黒ばえの宇治の山裾鷺渡る　八

五月晴　汀まで出て見る塔や五月晴　一〇

夏の日　栃の木の高きが上の夏日かな　九

夏の雨　傘さして杣戻りくる夏の雨　七

白樺の林に降るや夏の雨　同

夕立

溜川に降り出しけり夏の雨　同

一面の眞葛ヶ原の夕立かな　八

裏山に入りて戻らぬ夕立かな　同

高嶺より見えて降り来る夕立かな　九

雷

鳴る神のとゞろき渡る瀧の上　七

迅雷に慌てゝあがる川温泉かな　九

虹

傘負うて虹見て立てる峠かな　七

虹たちてあたりの樹々の雫かな　九

蒲葵樹の木蔭に佇てば沖の虹　同

薫風

薫風や高さ爭ふ栃二本　一〇

朝曇

籠さけて濱邊をゆけり朝曇　同

はてしなくあやめ咲く野の朝曇　同

烈日

烈日をさす立枯の梢かな　九

炎天

忽然と一峰聳ゆ炎天下　七

炎天に聳えて杉の並穂かな　八

炎天や役の行者は鐵の下駄　同

そゝり立つ巖ばかりなり炎天下　同

炎天を衝く噴煙をうち仰ぎ　九

日盛

日盛や舟をかついで磧行く　八

夕焼　大砂丘夕焼を見に上りけり　七

夕焼の空に向へる舳かな　九

夏の月

川下の峡を出でたる夏の月　七

白樺を照らしてのぼる夏の月　同

棧橋をいくつ越え来し夏の月　同

夏の月腰掛一つあらばやな　同

立枯の林の中の夏の月　八

さるをがせ揺らげる下に夏の月　同

濡れそぼつあたりの岩や夏の月　同

すぐ下に熊野の海や夏の月　九

眞菰江のはてよりのぼる夏の月　一〇

椅子さげて堤にのぼる夏の月　一一

雲の峰

沼舟の四方に聳えて雲の峰　八

赤松の並木のあひに雲の峰　一一

夏霞　絶壁にかゝる鎖や夏霞　八

圓虹　圓虹に登山の杖をあけにけり　七

圓虹に立ち向ひたる巖かな　八

御來迎　生涯にこの朝あり御來迎　同

御來迎人々珠數を揉みにけり　同

雲海　雲海に向つて吹けり法螺の貝　同

雲海に向つて鈴を振りにけり　同

雲海に浮べる島は生駒かな　同

雲海や紀の連山は突出す　同

地理

雪溪　眞向ふに雪溪かゝる峠かな　七

天そゝる大雪溪を眉の上　同

雪溪の眞下にかゝる瀑布かな　同

御嶽の雪溪またも汽車の窓　同

雪溪の下に湛へて龍ヶ池　同

雪溪を見る釣橋の袂かな　七

雪溪を朴の下より見上げけり　八

雪溪をわたれる人の見ゆるかな　同

上下の雪溪つなぐ瀧の絲　九

雪溪の眞下の流渉る　同

カンヂキを穿くや雪溪まのあたり　一〇

雪溪をのぼれる人の高荷かな　同

天がかる大雪溪や温泉の窓　同

雪溪の雲の中より人下る　同

雪溪の上より雲のとばりかな　同

雪溪を下る向ふに晝の月　同

お花畑

お花畑見下ろしつゝも峰傳ひ　七

雪溪の下にひろごりお花畑　八

お花畑踏み入りもして行きにけり　同

お花畑鈴を鳴らして通りけり　同

切株に腰打ちかけぬお花畑　同

蜜蜂の聲が親しやお花畑　同

少年の遺難碑ありお花畑　八

お花畑行き交ふ人の白衣かな　同

お花畑遠くの巌を人のぼる　同

巌頭の日を仰ぎけりお花畑　同

向ふよりさしのぼる日やお花畑　同

崖ばなへ出てしまひけりお花畑　同

獅子岩の吹きおろす霧やお花畑　同

すさまじく吹き上ぐる霧やお花畑　同

ちらばりてお花畑を行きにけり　同

お花畑百貫山も見下ろされ　一〇

むぐらもち出て可愛ゆしやお花畑　同

先達はや頂上やお花畑　同

正面に大雪渓やお花畑　同

大池を見下ろしゆくやお花畑　同

夏の山

岩室に雪一塊や夏の山　八

夏の山踏めばくづるゝ朽木かな　同

夏山の頂よりの熔岩の道　九

夏の川　白樺の林の中の夏の川　七

夏川の上に並べる岩屋かな　八

瀧

青くなり赤くなる灯のうつる瀧　七

瀧壺をめぐりて出來し棧敷かな　同

風吹いて俄に暗し瀧の道　同

木の枝にさがりて越ゆる瀧の道　同

佇める巖にわかれて落つる瀧　同

雲間より落ちて天河の瀧となる　同

籠負うて銛さけゆくや瀧の道　同

瀧の道高まる幹の間かな　同

瀧かゝる二本の栃の間かな　同

瀧道を挾んで栃の立つところ　同

乳母車押してのぼるや瀧の道　八

採集網かついでゆきし瀧の道　同

下登り上り下りなる瀧の道　同

木がくれに見過ごす瀧もありにけり　同

木の間より噴きくる瀧のしぶきかな　八

瀧水の岐れ落ちゆく蕗の中　同

正面に一瀑かゝる岩屋かな　同

一里ある阿古の瀧へも下りゆきぬ　同

倒木の凭れかはせる瀧の上　同

参道の杉のあひより那智の瀧　九

こゝに又楠の下より那智の瀧　同

杖とめて見下ろす方に瀧の音　同

瀧二つ並んでかゝる宿の前　同

走り来る人見てイちぬ瀧の道　一〇

病葉の落ちて来るなり瀧の面　同

瀧道や夜更けて辿る二人連　同

瀧の上の木の間を蟬のとび交ひぬ　同

遙けくも灼け立つ峰や瀧の上　同

負擔負うて瀧の案内者来りけり　一一

柚の宿瀧案内の札もかけ　同

この谷の四十八瀧柚は知る　同

柚のみに知られし瀧もありにけり　同

中空にしぶきとなりて消ゆる瀧　二

清水のせて置く清水の杓や草の上　八

松明をさしつけて見る清水かな　同

口あけて雉子の飲み居る清水かな　九

雪渓の麓の宿の清水かな　同

馬の背に清水の杓を受取りし　同

泉

木づたひに柚のおりゆく泉かな　八

人事

峰入

峰入の笠に字を書く帳場かな　八

峰入の込みあふ宿の帳場かな　同

登山

黒板をかけて登山の注意書　七

足早に追ひぬく登山巡査かな　同

杖とめて反りかへり居り登山口　七

驛頭に登山案内の太柱　同

登山者に近づく二百十日かな　同

とん〳〵と下りゆく人の肩に杖　同

登山杖かいだき食ふ通草かな　同

登山杖とりおとしたる巖間かな　同

一塊の雪に群れをり登山客　八

まつすぐに茶屋の土間ゆく登山かな　同

貝吹いて登つて来るや見下ろせり　同

祭

溪川を又渉る登山かな　九

登・山馬嘶き待てる朝餉かな　一〇

登山者に洞川の夜は明け放れ　一一

大臺を下りて其日に大峰へ　同

牧場より曳いて来るなり登山馬　同

川上に神輿洗の矢来かな　七

幔幕のすきま〳〵に祭川　同

浦祭海の中まで笹立てて　八

崖下の干潟を進む神輿かな　八

御所車遙おくれてとまりをり　同

對岸の渡御におくれて急ぎけり　九

島ヶ根につゞく祭の幟かな　一一

梶鞠

梶鞠を待つ間の長き雅樂かな　九

松の根を打つてころげぬ梶の鞠　同

扇もてはじき返しぬ梶の鞠　同

舟遊祭

渡御を待つ床几の前の大堰川　八

獻茶舟あやめ活けたる從へり　同

天神祭

遠くより見えて舳の宿禰かな　同

田搔

田搔牛後ろ手のべて曳き來る　同

頼政忌

宇治川の舟に浮びぬ頼政忌　一〇

頼政の忌日の菖蒲剪りにけり　同

早乙女

早乙女を載せたる舟のつゞきけり　八

早乙女のさぶ〳〵渉る田川かな　同

苗さけて早乙女川を渉り来る　同

早乙女は膝に笠置く憩かな　同

田植

前山を霤の下りくる田植かな　七

御嶽の雪溪の下田を植うる　同

アカシヤの吹きちるなべに田植歌　同

田を植うる畦に来て立つ子守かな　同

北陸に入れば早なき田植かな　同

常陸郡佐久良村なる田植かな　同

畦に立つ田植の手甲つけながら　同

午休して居る膝に田植笠　同

子を入れし籠負ひ来るよ田植道　一〇

田草取

蚋よけの頰被とや田草取　八

日傘

道草の兒を見て待てる日傘かな　八

春日野に見えはじめたる日傘かな　同

松が枝にかけし日傘のすとと落つ　九

兩の手は鬢に日傘は膝の上に　一〇

禿山を下り來る人の日傘かな　一一

日焼

舟行の一ト日の風に日焼けたり　一〇

日焼顔並び近づくデッキかな　一一

親子共日焼けし顔を甲板に　同

打水

楠の根をめぐりて水を打ちにけり　八

かゞみゐて水打つ庭のそこらかな　一一

打水のホースの先をたわゝす　同

打水のホースを置いて水とめに　同

葛湯

杣が妻葛湯の塵をはじらひぬ　九

葛湯してもてなす杣や夏の月　同

葛水や天倉山に雲かゝる　一一

葛水にもてなされる框かな　二

汗

汗拭いて袖の見上ぐる大樹かな　八

熊笹に汗の襦袢をぬぎかけし　同

裸

大木の下に斧ふる裸かな　七

裸子の棹さしてゆく眞菰かな　同

裸子の乘つて遊べる田舟かな　同

風呂の火の前に薪割る裸かな　同

虎杖の徑にひよつこり裸の子　八

裸子の舳に釣れる蜻蛉かな　同

川溫泉までランプ提げゆく裸かな　九

堤ゆく裸に抱ける著物かな　同

岩々の裸子を見て舟下る　二

蚊帳

日さむれば官舍の青き蚊帳かな　同

午寢

舷に午寢の足をあげにけり　八

倒木の下の砂地に壹寢かな　九

泳ぎ

泳子にテントの中の飴湯かな　八

釣橋の下に柚の子泳ぎをり　同

泳子の焚火してゐる岬かな　同

泳子を拾ひあげゆく小舟かな　一〇

泳子の中をわけゆく舳かな　一一

遊船

遊船のしりへに低き灯かな　七

遊船にとりかこまれて蟹沈む　九

遊船の乘場の杭の時計かな　同

あれを見よ僧の踊れる遊び舟　一〇

遊船の屋根に凭れて山を見る　同

遊船のはためき進む日覆かな　同

ヨット

紅のヨットはいづこ夏霞　同

覆へらんとして面白きヨットかな　同

鰍遊　水搏つてあがりし鳶や鰍遊　一〇

鶏飼　鶏の宿を訪ねなどして晝を居り　八

羽ばたきて引き出だされし荒鶏かな　同

鶏飼見の戻りの橋に月を得し　一〇

簗

簗尻に置かれて暗き灯かな　九

簗番を見てをる山の鴉かな　同

簗の上を低く飛びたる鴉かな　同

簗の上を歩いてあさる鴉かな　同

鴉飛び人現れぬ簗の朝　同

簗べりに鰰の顔のあらはれし　同

ちよぼ〳〵と簗を渡りし鼠かな　同

籠さげて簗に來て居る宿の者　同

橋をゆく御僧簗を飛ぶ鴉　一一

川床

川床の妓に聞く其後の人の上　九

暗き灯の名殘の川床に一人かな　同

ビール

岩むろへ取りにゆきたるビールかな　七

岩かけの砂地にビールサイダなど　八

心太窓下に鳴る雷や心太　同

避暑

玄關に採集網や避暑の宿　七

玄關を塞ける巖や避暑館　八

キャンプ

熊笹を刈つてキャンプの道作　九

訪ね來て覗きまはれるキャンプかな　同

夏帽

夏帽の人浮び見ゆ木の間かな　一〇

日覆

簀の日覆手摺の下に延びいでし　同

見下ろせば岩の間に日覆舟　同

日覆の紐をひつぱる鹿叱る　一一

簾　兩側の簾の間の闇深し　八

作り雨　作り雨遠くには又噴水が　二

藻刈　藻刈棹立てゝそこらを見渡しぬ　七

藻刈舟そこに來て居る朝餉かな　同

いつの間にいづちゆきけん藻刈舟　九

草刈　草を刈る石燈籠のほとりかな　八

干草　干草のよく乾きゐる午寢かな　八

動物

老鶯　老鶯や吉野へ下る尾嶺の徑　八

時鳥　老杉の下の床几やほととぎす　七

うつぼ草見て居る空をほととぎす　八

見通しの千本杉やほととぎす　同

さしかゝる油こぼしやほととぎす　八

鐘懸の眞下の谷をほととぎす　同

國分けの大王杉やほととぎす　同

杉による人小さゝよほととぎす　九

木の間より出て仰ぎけりほととぎす　同

こゝがその髪切山かほととぎす　同

四五軒の髪切村やほととぎす　同

岐れ路に立ちて話やほととぎす　同

架けかふる谷間の橋やほととぎす　同

雪渓の下をはるかにほととぎす　同

郭公　郭公の遠めき鳴ける牧場かな　一〇

蔑切　月の面へ躍りいでたる行々子　同

夏の鴨　夏の鴨飛びかくれゆく林かな　九

螢　相寄ると見えて外れたる螢かな　八

橋の上を消えて渡りし螢かな　八

螢火の消えて渡りし頭上かな　同

溝川に沿うてのぼれる螢かな　同

橋裏の水にうつれる螢かな　同

渡舟場へ螢を賣りに來てをりぬ　一〇

泣くことをいつか忘れて螢見る　同

橋欄を跨ぐ子叱る螢待つ　同

蟬

亂れ羽のまゝに蟬居る柳かな　八

夏の蝶室生寺の山遡る夏の蝶　九

浮巣船頭は吃の男や浮巣見る　八

鵜

浮きいでし蜑に鵜の岩聳えたり　同

鮎鷹

鮎鷹の飛んで鵜の川まだ暮れず　一〇

鰹

我船のあふりを喰つて鰹舟　九

天魚

宿の子の天魚釣るとて下りし徑　七

岩魚

上の瀬に岩魚釣れるは宿の者　同

柚一人岩魚をさけて戻りけり　八

柚人は岩魚割くにも山刀　同

木の間より立現れて岩魚釣る　九

岩魚釣る山のホテルのボーイかな　同

鮎

笠を著て山役人か岩魚釣る　同

岩魚籠さけて倒木渡り來る　一二

水すつて引きよせられぬ囮鮎　七

鮎釣の竿ひかへ待つ筏かな　八

鮎はしる温泉の外の流かな　九

鮎釣の笠に斜の山雨かな　一〇

鮎釣に又落しくる筏かな　同

愛宕の嶺少しのぞけり鮎を釣る　同

鮎釣るゝ見て浸りゐる川温泉かな　二

高野より下り來し人や鮎の茶屋　同

闘魚

温室の椰子のかけなる闘魚かな　一〇

水馬

風吹いて一度に飛べり水馬　七

山繭

山繭を見上げ憩へる旅人かな　同

繭

繭市に娘も從いて來てゐたり　九

帶かけて繭籠負へる人の後　同

蛾

白き蛾のむらがりとべる梢かな　七

白き蛾の浮べる朝の代田かな　八

蠻

蠻をはらひもぞゆく馬上かな　一〇

蛇

熊笹の徑の最中に交る蛇　七

渡りゆく蛇のあとより礫かな　七

渡りゆく蛇見て立ちし渡舟かな　同

蟇

覆りたるまゝ居る蟇や木下闇　九

兩側へわかれて入りぬ蟇　同

蛸

蛸さけて玄關に立てる漁師かな　八

植物

菖蒲

頼政の墓にさしある菖蒲かな　八

朝起の人追々に菖蒲園　一〇

若葉

若葉して鶏匠の家は皆富めり　八

通草の花

見上げをる通草の花の匂ふなり　八

一本の竹にまとひて花あけび　一〇

定家かづら

散り来るは定家かづらの花とかや　八

蓮

蓮を見に来てなつかしや京の山　同

卵の花

鞍壷に折つてさしたるうつ木かな　同

卵の花の下より道を尋ねられ　九

つるでまり

立枯の幹をつゝみてつるでまり　九

比叡にもめづらしからずつるでまり　同

薪を割る後ろに高しつるでまり　一〇

向うにも又向うにもつるでまり　同

かきくらし雨来るらしもつるでまり　同

霧雨の晴れては降るやつるでまり　同

額の花

額の花ばかりの澤に出でにけり　八

夏の日を淡しと思ふ額の原　同

額の花流に沿うてつゞくなり　八

三亂の流の岸も額の花　同

奥入瀬のこの頃はまた額の花　同

額の花ばかりの中にかじか小屋　同

額の花高まる橋の袂かな　同

額の花ばかりの中に日を仰ぐ　同

牧場のみづくあたりの額の花　同

倒木の沈みて長し額の中　九

宿院へつゞける徑の額の花　同

忽に濁る清水や額の雨　同

札立てゝ露營地とあり額の澤　同

切株にこぼれて額の花粉かな　同

大まかに過ぎし日照雨や額の原　同

行者葱

舊道をゆきてとらばや行者葱　八

案内者のとりつゝ行くや行者葱　同

深山しぐれ

窓あけて深山しぐれの花を見る　九

早苗　早苗舟溝一ぱいに棹し來る　七

青蔦　青蔦につゝまれ灯る燈籠かな　九

葛の上に載せて乾しある飯籠かな　七

葛むぐら柚の蓆戸かくれけり　同

鶏を抱へて戻る葛の徑　同

脱ぎかけし女のものや葛むぐら　同

女房の葛がくれなるゆあみかな　同

玉だれの葛といはゞや柚が窓　同

傘たてゝ柚のゆあみや葛の雨　同

岨道に引きおろしある眞葛かな　同

炭竈のうしろに高し葛むぐら　同

鍋さけて下りゆく柚や葛の徑　八

麓より吹きあぐる風の葛の山　同

たゞ丸き葛の山なり宿の前　同

釣橋の下一面に葛の花　九

葛むぐら越しに見下ろす温泉宿かな　九

梯子して葛刈つてをり宿の前　同

葛の花こぼれてたぎつ地獄かな　一〇

かつぎゆく長柄の鎌や葛の徑　同

凌霄

凌霄に朝日あたりてよき住居　一二

麥

夕風に打ちあふ麥の筵かな　七

菅笠に著流しの人麥の秋　同

端書讀む框の入や麥の秋　同

麥秋の笠のせて舟つなぎあり　同

手の傷をなめつゝ來るや麥の秋　同

麥秋や埃まみれの裸の子　八

菓子盗み逃げてゆく子や麥の秋　同

麥秋の笠ぬいで入る酒屋かな　同

麥秋や子供遊ばす舟の中　同

水馴棹のべて押しやる麥埃　同

少しづつ流れ出るなり麥埃　同

鉢巻をしめつゝ走る麥の秋　八

股引を穿いて裸や麥の秋　同

麥秋の今日の埃を焚きにけり　九

肌ぬぎの女出て來て麥を搔く　同

麥刈の鎌をかざせば晝の月　一〇

轢死者は自殺といふや麥の秋　同

茂り

大齒朶の茂れる中を走る水　七

茂りたる木賊の島のつゞくのみ　同

一石をめぐりて茂る木賊かな　同

綠蔭

綠蔭の舟に寢せある子供かな　七

綠蔭に群れゐて飛ばず水馬　同

綠蔭の舟に子を抱く女かな　同

綠蔭に並びて舟を見送れり　一一

木下闇

下闇に一人靜といへる花　七

だしぬけに一鳥啼きぬ木下闇　同

踊み見る光り苦ぞも木下闇　同

下闇に入りてしづけき舟の路　八

下闇のこゝより道に迷ひけん　同

大名の屋敷址とか木下闇　同

次々に屋敷の址や木下闇　同

苔むせる岩ばかりなり木下闇　同

下闇に常さんの小屋今もあり　九

下闇の道にはつ〳〵日蔭蝶　同

あやめ

あやめ池燕は水を搏ちて飛び　一〇

縁先を走れる水のあやめかな　同

あやめ野のところ〴〵に残る霜　同

杜若

かゞみよる橋の手摺や杜若　七

手紙書く窓の下なる杜若　一〇

庭づたひ文の使や杜若　同

鷺菅

鷺菅の澤深みゆく草鞋かな　同

夏雪草　炎天に咲いて夏雪草の花　一〇

たかねばら　青空に咲いて淡しや高嶺ばら　同

著莪の花　谷かけて倒木長し著莪の花　七

光り落つ杉の雫や著莪の花　八

薔薇　花ばらのアーチの下に迎へらる　一〇

葉櫻　葉櫻の下に寢覺の道しるべ　七

石楠　石楠にかくれて役の行者かな　九

朴の花　朴の木の梢の花につける蜂　七

天津日の下にたゞれて朴の花　同

天邊に咲いてあはれや朴の花　九

栃の花　栃の花暫くしては落ち来る　七

まつすぐに落ちて来るなり栃の花　同

覇王樹　覇王樹の紐の先なる紅の花　八

新樹　燕の遡りたる新樹かな　同

煤煙のなだれ落ちゆく新樹かな　同

新樹より吹き散る塵のありにけり　同

病葉　病葉の炎のごとき木の間かな　一〇

牡丹　強力のとりにゆきたる牡丹かな　七

茂りたる葉のまん中の牡丹かな　八

院々の門に競へる牡丹かな　一一

夏柳　積まで乗り出て茂る柳かな　七

葉柳のさがれる舟の障子かな　八

鈴蘭　鈴蘭に馬の足型ありにけり　八

西瓜　柚の子の裸に抱ける西瓜かな　九

西瓜たべ下津井節を聞いて發つ　一一

苺　旗竿の下に寄り來ぬ苺狩　一〇

罌粟　罌粟搔の二人離れていつもあり　九

夏草　傾きて古き釜あり夏の草　八

青蘆　青蘆の生ひめぐらせる溫泉かな　九

青蘆の上に乘り出て水車踏　一〇

水芭蕉　沼尻は林をなせり水芭蕉　同

牧場の流に沿ひて水芭蕉　同

萍　萍の花もいろ〳〵舟進む　八

秋

藻

篝火の下を流るゝ藻屑かな

七

時候

今朝の秋　今朝の秋杣並び來る森の道　七

新涼　新涼の杉の木の間にさす日かな　八

新涼や人を迎へに夜の驛　二

朝寒　朝寒の杣會釋して行き過ぎし　一一

朝寒や長きハッピの渡舟守　同

夜寒　カンテラを提けて夜寒の岩風呂へ　九

鐘釣の下の溫泉の夜寒かな　同

玄關にそばだつ巖の夜寒かな　同

ひたすらに夜寒のバスの走るのみ　一一

秋の暮　戻り來て一人離室へ秋の暮　九

秋の暮門の騷ぎもしばしほど　九

噴水はあがつて居れど秋の暮　同

遠方をゆく人一人秋の暮　一〇

奈良はこの築垣の道の秋の暮　同

歸りゆく鹿のうしろや秋の暮　同

門前に組むうしろ手や秋の暮　同

武藏野と云へる宿屋へ秋の暮　同

とまりては又行く鹿や秋の暮　同

秋の夜　秋の夜やどの間の客もおとなしく　一二

秋雜　落ちかゝる巖より垂るゝ蔦の秋　九

あと戻りしては又行き耶馬の秋　同

磯に立ち沖見る老や島の秋　同

天文

天の川　すゝみゆく檣燈暗し天の川　九

積温泉に誰か居るらし天の川　一一

秋晴　秋晴や幹をこぼるゝ蟲の糞　七

笊かつぎ岩に立つ子や秋日和　同

秋晴やはるかの下に黒部川　七

秋晴や阿蘇の五岳もかくれなく　九

秋晴や外輪山に雲沈み　同

秋晴の第一峰の茶店かな　同

秋晴や昨日の阿蘇を海上に　同

灣内に群れ立つ波や秋日和　同

秋晴や濱にひろけて小切れ賣る　同

車座にデッキの客や秋日和　同

秋晴や木かけに入りて木兎仰ぐ　二

秋晴や九十九島々漕ぎめぐる　同

秋晴や鞄預けて濱へ出づ　同

秋晴やバスの車掌と小ぜりあひ　同

秋の雨

傘さして鋸負ひゆくや秋の雨　七

秋雨の傘が觸れたる巖かな　九

秋雨や旅程を變へて耶馬溪へ　同

秋雨や巖の裾ゆく牛車　同

秋雨の傘かへしやるバスの窓　同

傘さして築見廻りや秋の雨　九

秋雨にそぼぬれ歩く宿浴衣　同

焚かせてもぬるき風呂なり秋の雨　同

拜殿にひろげし桑や秋の雨　同

傘さして水荷なひゆく秋の雨　同

阿蘇に來て噴煙も見ず秋の雨　同

傘さして荒磯に立てり秋の雨　同

秋雨や新聞讀みに圖書室へ　二

秋の空

秋天の下に砂丘があるばかり　七

秋天へ足跡つゞく砂丘かな　同

秋天の巖より巖へロープかな　九

秋天へ土礫をあげて發破かな　同

秋天に折れてさがれる梢かな　同

鷹と云ひ燕と云ふや秋の空　二

月

月代の木の間に浮ぶ尾上かな　七

三味線をさけて町ゆく良夜かな　同

對岸のホテルの上の月更けぬ　七

まんまるき葛のむぐらをのぼる月　同

湖の月を見下ろす木の間かな　同

石蕗の鏡のごとき良夜かな　八

鉦叩く籠の寺や今日の月　同

月の瀬を渉りて到る溫泉かな　九

綿雲のみなぎる中に今日の月　同

月の出を待ちて浸れる洞溫泉かな　同

月細し鐘釣山の頂に　同

釣橋の下の磧に今日の月　同

月代に薄の丘のうねりかな　同

見上げたる橋に人佇つ良夜かな　同

岩わたり〳〵月見の酒運ぶ　同

まどかなる月をかゝげぬ瀧の上　同

岩を飛び流を渉り今日の月　同

巖めぐり〳〵てのぼる月見臺　同

草山の波のうねり〳〵今日の月　同

月の座に玉蜀黍の出されたり　同

月を待つ向ふの山が祖母山か　九

窓下に寢しづむ舟や今日の月　同

洞門の向ふの海に月出づる　同

西國のとある港の月を見る　同

颱風のあとかたもなし月の海　同

天草の岬の先にのぼる月　同

高潮を躍り出でたり今日の月　同

一廻りして出る舟や月の下　一〇

舟をやる月に寢しづむ家の間　同

月空へ躍りてすゝむ舳かな　同

月出でて故郷に似たる山河かな　同

濱に出て顧みすれば月のぼる　同

雲間洩る月に光れりをちの海　同

波荒くなりて返すや月見舟　同

渡月橋往き來の人に月のぼる　一一

海の月皆見て通る宿の前　同

島の月迎の舟の來りけり　同

苫舟の寢しづむ中を月見舟　同

杉山のあひの草山月のぼる　二

月あけて傾きあへる梢かな　同

月こゝにあからさまなる木の間あり　同

見下ろしの谷間の杉に月のぼる　同

はるかなる月の汐路をよぎる舟　同

無月

湖に雨だれ落つる無月かな　七

傘さして出づる舟ある無月かな　同

観月の提灯あかき雨夜かな　同

湖へ落つる雨月の傘しづく　九

傘さして運ぶ雨月の料理かな　同

暗き灯の舟一つゆく無月かな　同

苫舟の洩らす雨月の灯かな　二

搖れあうてかゝる無月の舟二つ　同

縁にある雨月の傘をさして出づ　同

初嵐

大木の下の茶店や初嵐　七

植込みにすぐ散る煙初嵐　同

秋の日　切株の上の乾飯に秋日かな　八

深林の徑に見上げし秋日かな　九

秋の雲　後ろ手を組んで仰げり秋の雲　七

焼岳の煙につゞく秋の雲　九

うろこ雲　島宿の庇の上のうろこ雲　同

秋風　競ひ立つ巌に名はあり秋の風　七

秋風や伐り残されし森の王　同

根元より岐るゝ幹や秋の風　同

秋風や飛驒へ通ずる杣の徑　同

空ざまに倒木の根や秋の風　同

子を負うて釣橋渡る秋の風　同

まつすぐな林の道や秋の風　同

秋風や舟に泛べば流人めく　八

高黍の中をゆくなり秋の風　同

秋風に吹き返へされぬ道をしへ　八

秋風や渺茫として枯木原　同

秋風やひたすら喰める牧の馬　九

焼岳の噴煙見れば秋の風　同

高きより裂けたる幹や秋の風　同

秋風や大臺ヶ原は方三里　同

倒木の原と云ふべし秋の風　同

秋風や高崎山は葛ばかり　同

秋風や外輪山に汽車かゝる　同

笠を著て裸の舸子や秋の風　同

秋風や馬逐ひ上ぐる草の山　同

秋風に汐干狩せる島の子等　同

めぐり見る流人の塚や秋の風　同

秋風や目を伏せて見る沖の島　同

秋風の渡頭に提げし鞄かな　同

秋風や呼べど返へさぬ島渡舟　同

秋風や島に下りたる客一人　同

秋風や出島の磯に人を見ず　二

野分　山水の道に噴き出る野分かな　九

露

杣の戸を立ちいづるより露時雨　七

幹につる郵便受や露時雨　同

片庇して住む杣や露時雨　同

ばつさりと犬飛び込みし露葬　同

鎌倉葛原岡神社

草葺のたゞの屋根なり露時雨　同

霧

生れしは女の子なり露の宿　九

今日と暮れあしたと過ぎぬ露の宿　同

倒木に動亂したる狭霧かな　八

霧卷をぬけきし人に葛湯かな　同

鐘懸を霧の絶間に仰ぎけり　同

漂ひて杉の間に残る霧　同

まつすぐに立ちのぼる霧の迅さかな　同

二ヶ谷の霧立ちのぼり相搏てり　同

絶壁の面を飛べり霧しまき　八

霧雨のしづかな音や小笹原　同

吹き上ぐる霧に面をそむけけり　同

四方より霧吹き上ぐる巌かな　同

霧晴れて尚遙なりお頂上　同

上る霧下る霧あり谷向ひ　同

一筋の霧立ちのぼる樹海かな　九

霧の根のうすれてのぼる樹海かな　同

霧の上に浮び出でたる白馬かな　一〇

晴れまどふ霧の上よりお頂上　同

谷あひの村をうづめし夜霧かな　同

這ひわたる霧幾筋や遠野原　同

さよならと云ふ聲さへも霧の中　一一

千々岩灘霧の絶間に見下ろされ　同

地理

秋の水

絶壁の下に湛へて秋の水　七

倒木にせかれてめぐる秋の水　同

秋の水木賊の中を流れけり　同

順々に小さき鮒や秋の水　八

綸垂れて散りし小魚や秋の水　同

秋の湖

乘り入れて馬に水飼ふ秋の湖　七

蔦の門を出でしところに秋の湖　同

倒木をくゞりて出でぬ秋の湖　同

秋の海

巖傳ひ下りゆく老や秋の海　九

崖下の秋の海邊に兩三家　同

懸崖の松の下より秋の海　一〇

夕燒の雲のみだれや秋の海　同

杖ついて秋の海邊の物拾ひ　同

尾嶺づたひゆくやや左右に秋の海　一一

秋の山

笛鳴つて迎の船や秋の山　七

秋山の裾の砂地に舟著けし　一一

出水

大川の二つ並びて出水かな　九

流材に蔦口のべし出水かな　同

出水見の舟の舳の巡査かな　一〇

花野

頂上の花野に遊ぶ兎かな　七

案内者を返してよりの花野かな　同

自動車を驅りゆく朝の花野かな　八

雨晴れて兎飛び交ふ花野かな　同

朝虹の下の花野を行きにけり　同

しづかにも霧のおりきし花野かな　同

蒲團負ひランプさけゆく花野かな　九

噴煙を望んで辿る花野かな　同

迅雷にうづくまりたる花野かな　同

遠方を人岐れゆく花野かな　同

遠方を牛群れわたる花野かな　同

ガソリンがきれてバス居る花野かな　同

湯山村越えて見にゆく花野かな　同

硫黄採花野を越えてゆきにけり　同

遠方の松を目當てに花野ゆく　同

大阿蘇の浮びいでたる花野かな　同

深林をぬけていよ〳〵花野かな　同

あちこちに雲の影ある花野かな　九

湖の入江につゞく花野かな　一〇

舟下りて思ひ〳〵に花野ゆく　同

後ろより馬のつきくる花野かな　同

あやめより黄菅に移る花野かな　同

夕霧の下りてよりゆく花野かな　同

この門に徑のあつまる花野かな　同

背の莫蘆の雨乾きゆく花野かな　同

石のせて旅人塚ある花野かな　一一

供連れて湯治の客か花野ゆく　同

溫泉けむりのふと走りたる花野かな　同

峠茶屋花野を統べてありにけり　同

馬と駕籠と馬ゆく花野かな　同

馬に乘つて花野の朝は行くべかり　同

人事

七夕七夕の竹捨てゝあり菱疊　八

七夕の竹流れゆく川溫泉かな　二

瀧の面を七夕竹の落ち來る　同

吉野川その兩岸の星祭　同

川上に妹背山あり星祭　同

棚經　棚經や襷はづして嫂も來る　二

燈籠　流燈を泛べてひろし大堰川　七

流燈の殖えゆくまゝにひろごれり　同

燈籠をかけて靜や旅の宿　二

燈籠の前をよぎりし煙かな　同

かゝりゐる外國船や流燈會　同

燈籠の尾のばらくと吹き上る　同

島の前燈籠迅く流れけり　同

墓參　花さげて出て待つてをり墓參　八

踊　登山者の下り來し町の踊かな　七

御嶽の麓の町の踊かな　同

山宿のコックも出でて踊るかな　九

子規忌　俳諧の渡佛日記や獺祭忌　二

夜なべ　節穴をのぞくと知らず夜なべかな　七

施餓鬼　噴煙をのぞんでのぼる施餓鬼僧　九

地藏盆　加茂川の柳地藏も祭かな　八

秋祭　幕干して昨日やありし秋祭　二

障子洗ふ　この宿や障子洗うてまだはめず　九

下り簗　妹山と背山のあひに下り簗　同

木賊刈　倒木に刈つては載せる木賊かな　七

小鳥網　雨降りて酒にこもれる鳥屋師かな　二

動物

蜻蛉　蜻蛉の群れとぶ下の舟に乘る　九

舷に沿うて進めるヤンマかな　一〇

蜩

蜩や青田の上の杉木立　八

蜩や庵をめぐりて杉木立　同

蜩やさしかりたる木馬道　八

鹿

丸窓の障子をなめし牝鹿かな　八

はるかなる木の間を鹿の驅りけり　同

三笠山追ひかけられて鹿のぼる　九

小鳥

相逐うて谿をのぼりし小鳥かな　一〇

渡鳥

赤き實の倒木に下り渡鳥　九

仰向いて黍刈る人や鳥渡る　一二

秋燕

仰向いて秋燕を見る舳かな　八

舷に並んでるたり秋燕　同

鶺鴒

岩裾の少し砂地に石叩　九

懸巣

葉がくれに我を見てをる懸巣かな　一〇